

十六世紀における堺商人の動向

——天王寺屋をめぐる——

速水 佐恵子

応仁の乱から織豊政権の成立にいたる時期の特色の一つに、都市における町人階級の台頭が挙げられよう。そうした庶民の動きが具体的にいかなる型をとってあらわれ、各方面に影響を及ぼしていったかについては多くの研究が示すところであるが、それらは貨幣経済の発展に伴って彼等がこの時代の新たな文化の創造者として成長するにいたったことを伝えている。

都市における彼等の活躍は畿内を中心に応仁の乱前後から著しくなり、武士階級の下剋上の雰囲気をもよおし彼等自身の独自の発展をみせていった。その代表として挙げられるのが堺であり、耶蘇会の宣教師をして「日本全国當堺の町より安全なる所なく、他の諸国に於て動乱あるも、此町には嘗て無し」といわしめた程の自由で平和な空気は、我が国の歴史において自由都市としての発

展を最も早く示した町として多くの注目を浴びてきた。特に中世末期より近世にかけての堺をめぐる商業、都市、商人に関する研究の対象としてとりあげられることが多く、堺の誇った自治組織さらには貿易商人や海運業者を中心とする経済活動、ならびに彼等の果した文化的業績は大きな意味をもつと評価されてきた。

従来(1)の十五・六世紀における堺商人の研究は大きくわけて次の二つにまとめられるように思われる。一つは堺の自治にあずかっていた町衆の性格に関するもので、会合衆という名で呼ばれた彼等が庶民の出自でなく、限られた富豪階級であったことから、堺における商人の特殊性が指摘されるようになった。そして後の元禄時代に見られるような町人独特のものとなり得なかった彼等の文化の性格をもあわせ考えるとき、ヨーロッパ的自由都市の特質と同一視することが不可能だと考えられた。他の一つは堺商人の性格を主として文化活動を中心にとりあげるもので、東山時代によって代表される貴族的隠遁的な性質の文化と、一方室町時代を通して闘われた土一揆を中心とする農民の実力的台頭による郷民文化との媒介的役割を果たしたとする。前者は主に堺商人の商業活動、都市の内部構造の性格を論ずる豊田武(2)、原田伴彦氏等の主張するところで、問屋・高利貸・有力商人等に代表される上層町人こそ堺の自由組織の運営者であったと考えた。一方後者は林屋辰三郎(4)、芳賀幸四郎氏等(5)によって示され、幕府という中世的権力からの解放と、町衆自らの組織的団結により多くの文化的所産を残したことを指摘するものである。信長、秀吉といった専制的権

力によって絢爛豪華な桃山文化が形成された背後には、織豊政権と結びついた堺商人によって代表される豪商の存在があったことも示されている。

しかしながら専制的自治体を形成していた土豪的、門閥的富商と呼ばれる特権階級が、漠然とした概念のうちにとらえられており、個々の例のうちはその本質を分析し、論じられることが少ないように思われる。堺商人の場合をとりあげても、ひとしくその特殊性を指摘するあまり、内部における複雑性を無視してはいないであろうか。畿内商人をめぐるものとしては僅かに近世初頭における京都の三長者、角倉・茶屋・後藤氏をとりあげられた林屋氏の研究⁶⁾、あるいは帰化系商人として奈良を中心に活躍した楠葉西忍とその子新衛門元次をめぐる三浦圭一氏の見解等⁷⁾が挙げられるが、中世から近世にかけての商人研究はいまだ低迷の感があるといわれねばならない。その理由の一つに、都市の内部構造や商人自身の動向、さらには商業活動の組織等を示す史料の少ないことが挙げられよう。

ここでは室町末期におこり、十六世紀を通じて堺にあって栄えた天王寺屋、すなわち津田氏を中心として、堺商人の性格を考察してみようと思う。

註

- (1) 『耶蘇会士日本通信』 上巻所収、一五六二年(永禄五年) パードレ・ガスパル・ピレラの書簡。

- (2) 豊田武『日本商人史—中世篇』一九五〇年、『増訂日本商業史の研究』一九五七年、『堺』(日本歴史新書)一九五七年
(3) 原田伴彦『中世における都市の研究』一九四二年、『封建都市の自治組織』(『日本封建制下の都市と社会』所収)一九六〇年。

- (4) 林屋辰三郎「町衆の成立」『東山時代と民衆の生活』(『中世文化の基調』所収)一九五三年。

- (5) 芳賀幸四郎『近世文化の形成と伝統』一九四六年。

- (6) 「上層町衆の系譜—京都に於ける三長者を中心に—」(前掲『中世文化の基調』所収)一九五三年。

- (7) 「室町期における特権商人の動向—楠葉新衛門元次をめぐる—」(『中世社会の基本構造』所収)一九五八年。

二

江戸時代に作製された堺の地図に注目すると次のようなことに気づく。すなわち旧城下町にみられるような、中央に領主の存在を示す館といったものが存在しないこと、さらに市のほぼ中央を走る大小路通により南北に二分され、その両側には市ノ町、湯屋町、材木町、宿屋町といった町の特質を示すと思われる名前をもった各町が存在すること、これらはそのまま堺の性格を示してい

るように思われる。堺に関する叙述は『堺市史』に詳しいが、天王寺屋一族の動向を明らかにする前に、彼等が生きていた時代の堺の発展と構造にふれてみたいと思う。

中世社会にあって早くから自治組織をもつ都市としてその特色を注目される堺は、南北朝の内乱以後十六世紀にかけて繁栄の一端をたどっていた。堺の起源については潮湯、すなわち湯治の場所として早くも鎌倉中期に相当の聚村が形成されていたといわれるが、⁽¹⁾以後は単なる村落から港湾としてその存在を知られるようになり、さらに南北朝内乱の頃より商港、軍港としての機能を果たすようになった。また堺の位置が南海交通の要衝にあたり、畿内と四国、九州、さらには支那大陸とを結ぶのに恰好の港であったことは、単なる商港としてのみでなく遣明船の発着点としても重視される結果となった。⁽²⁾船舶の出入が頻繁になると共に住民の中には外から堺に移り住む者が多かつたらしく、「義尚將軍記」⁽³⁾文明七年(一四七五)の記事は次のように伝えている。

去六日、^(八月)京都大風、両陣破損、無是非、山城下狛邊猶以大風云々、和泉堺高塩打入、在家数千間、船数百艘、人民数百人被引大流、無跡形失了、(中略)濱在家ハ大略京都致落人、大舎人織手師法花宗僧共也云々、不便不便

これによれば堺住人の多くが京からの逃亡者であって、なかでも大舎人、織手師、僧侶等庶民が海岸近くに居住していたと伝えている。戦国争乱を避けてこの地に移り住んだ者の中には貿易商人として未知の国へ赴く者も多かつたであろう

我が国の歴史上室町時代における文化を代表する時期としてとりあげられる東山時代は、幕府権力の失墜に伴う民衆勢力の成長により、郷村の中で生まれた彼等独自の寄合のひろまった時代でもあった。足利義政を代表とする、いわゆる貴族的な傾向の文化が生みだされた反面、連歌会、茶会といった一味同心的な寄合が民衆の間に生まれた。それらは農村や都市の発展と結びついて活発化するが、町人の台頭の目覚ましい堺では特に著しく、主に新興の富商の間に流行していったのである。当時の堺の様子をよく描写しているものに耶蘇会士たちの本国に宛てた書簡があるが、そのうち『耶蘇会士日本通信』に所載され、当時の堺の町政にふれているものをとりあげてみよう。

「堺の町は甚だ広大にして大なる商人多数あり、此町はベニス市の如く執政官に依りて治めらる。(中略)堺の町は住民多数にして富み、且好地位を占有せる為め常に平和にして侵すべからず」⁽⁴⁾

「堺の町は甚だ富み多数の住民あり、ベニスの如き政治を行ふ所なり」⁽⁵⁾

かかる書簡をのこした宣教師たちは、天文年間をはじめて我国に渡来以来、九州薩摩の諸港を出入して貿易に従事するかたわら、熱心に布教につとめていた。彼等による報告は我が国の戦乱の様相を伝える一方、当時の堺の自治組織にみる特殊性を物語る好史料といえよう。堺をベニスのごとき自由都市と評していることについては従来も多くの学説が注目するところであって、当時の堺の

性格を異邦人の目を通して表現したものと見て軽視することはできない。

耶蘇会士たちが文中で「執政官」と呼んだように、堺の町衆たちが早くから会合衆と呼ばれる代表者を定めて町政にあたらせていたことは周知の通りである。会合衆については堺にかぎらず畿内を中心とした他の都市にもみられるが、海岸附近に納屋を有し、それを一般商人に貸与して利を得ていた納屋衆と呼ばれる有力商人の中から、さらに三十六人の代表が選ばれて会合衆という組織をつくっていたといわれる。⁽⁶⁾ 彼等は恵まれた財力のもとにその土地に確固たる経済的基盤を築いていた。こうした組織がいつ頃からあったかは明らかでない。しかし、堺海会寺の季弘大叔の「蔗軒日録」(『堺市史』第四卷所収)には、文明十六年(一六四〇)八月に早くも会合衆が存在し、祭礼の頭にあつたことがみえる。また「会合衆」という名は見えないが、同書文明十八年二月十二日の項には、「印首座今北莊経堂にあり、経堂は地下之公界会」とあつて、町衆の代表者の集会が行われていたことが理解されよう。

室町期に早くもそのような組織が存在していたことはこれより明らかになったが、十六世紀に入りますます彼等の経済的地盤がかたまるにつれて自治都市としての体裁が整えられていったようである。かくして天王寺屋一族が生きていた時代の堺は、畿内における戦火の渦中にまきこまれることのない平和な都市を誇っていたと言えるであろう。

註

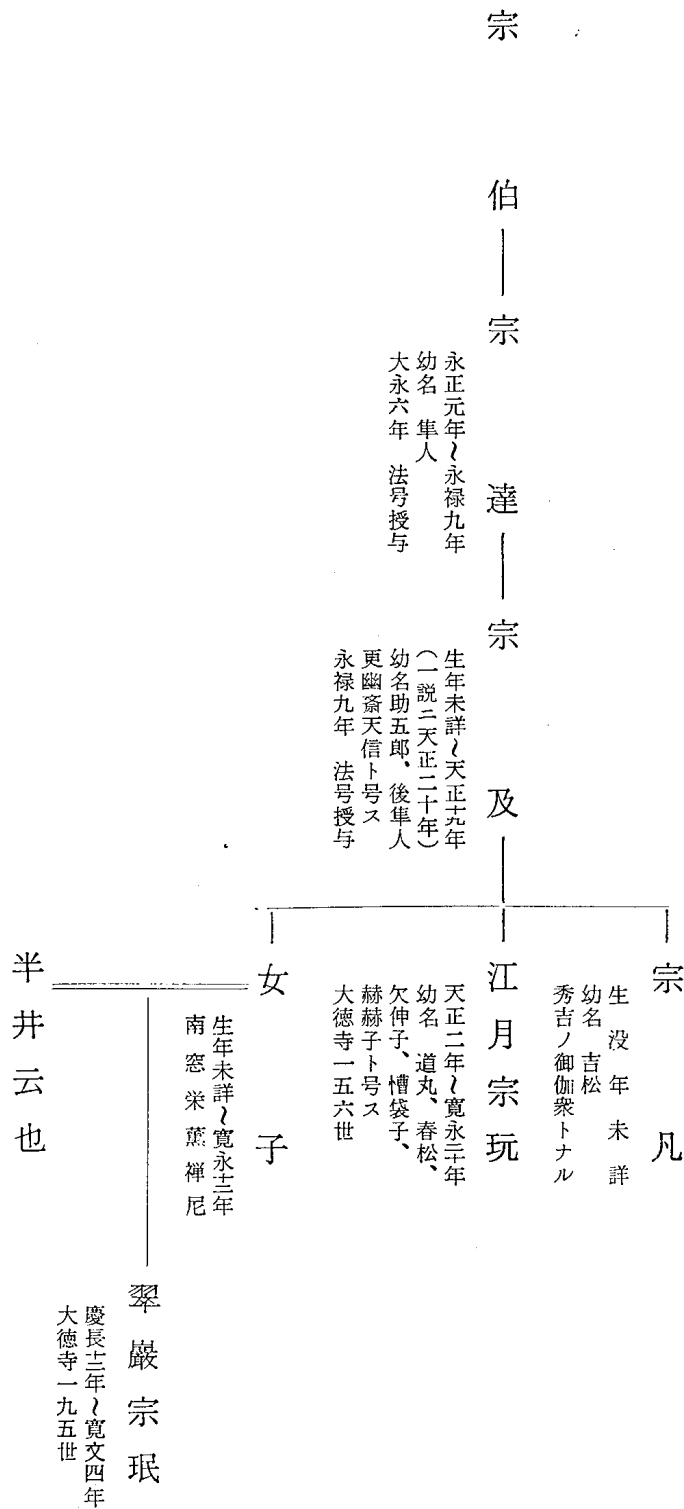
- (1) 前掲豊田武『堺』。
- (2) 堺における第一回目の遣明船は文明八年とされている。
- (3) 「後鑑」卷二百廿一(『統国史大系』第八卷所収)文明七年八月十四日。
- (4) 一五六一年(永祿四年)パードレ・ガスパル・ピレラの書簡。
- (5) 一五六一年(永祿四年)パードレ・コスモ・デ・トルレスの書簡。
- (6) 会合衆の三十六という数については高尾一彦氏が「京都・堺・博多」(岩波講座『日本歴史』近世I所収)の中で「三十六の数字は、月行事三人、十二ヶ月で計三十六人となるから、実務運営を考えれば合理的であり、事実、他の港町でも三十六人衆の制度が見られる」と述べておられる。しかしながら文明年間には十人をもって構成されていたことがあり、会合衆の組織については、なお今後の研究課題の一つと思われる。

三

さて天王寺屋として名高い津田氏についてであるが、十六世紀とくに一五五〇年以後の動きについては宗達、宗及、宗凡の直系

三代による「天王寺屋会記」からその活躍を窺うことができる。しかしながら、「天王寺屋会記」がその質量、信憑性からいって史料価値の高いものとされ、事実堺商人の動きをめぐる研究の多くがこれを史料として重視しているにもかかわらず、茶道会記と

✓しての域を出ないところから、天王寺屋自身の系図的考察には役立つことが少ない。従って天王寺屋の系譜に焦点をあわせて論をすすめるには充分でないが、天王寺屋に関する当時の文献等をもとにして考えられる一族の系譜を図示すれば次の通りである。



この他宗達の兄弟には宗閑、了雲、道叱がいたことは確かであり、それぞれ活躍していたことがわかるが、詳しいことは不明なのであけるのを避けた。天王寺屋の系譜のはっきりしない理由の

一つとして考えられることは、一族が十六世紀全体を通じて豪商として広域にわたって活躍していたにもかかわらず、翌十七世紀に入っていわゆる天王寺屋本家がまったく廃れてしまったことで

ある。「宗及没、嫡子宗凡継家督、宗凡没而無遺跡、大徳寺内龍光院江月和尚者宗凡弟也、家伝之茶具不殘江月和尚江来り、于今龍光院ニアリ、此書モ其ノ内也」と「天王寺屋會記」を書写した木下俊長の識語にみえるのはこのことを何よりも示しているよう。

宗凡が没して一族が絶えた年代は明らかでない。宗凡自身元和二年に覺書をのこしているから、この頃はまだ生存中であろう。徳川時代になると一般に家柄が尊ばれ、武士をはじめ庶民にいたるまでこぞって系図を作製したのであったが、その多くは寛永以後であり、津田氏の系図が残されていないことからこの頃にはすでに跡を絶っていたと推定される。わずかに宗凡の弟にあたる江月宗玩が大徳寺に入って同寺一五六世として出世したことから「天王寺屋會記」も宗玩のもとにわたり、今日に伝えられたのであった。室町時代後半より安土桃山時代にいたる動乱の時代を生きてきた津田氏の活躍は、たんに堺においてのみでなく、京畿全体、果ては九州にまで及び、また接した人間範囲も信長、秀吉といった時の権力者をはじめとしてきわめて広いものであったが、織豊政権と並んでむなしく消えていった感が深い。その点常に津田宗及と比較される千利休が、その子孫の封建的勢力への奉仕により茶道家元として権力を世襲していったのに比べて対照的であったといえよう。

出自を明らかにする系譜に関する史料が少ないところから、津田氏がいつ頃から堺に居住するようになったかを示す決定的な史料は残念ながら見当らない。江戸時代になって著わされた茶道関

係の系図には「津川宗伯、左海^(堺)天王寺屋」とあるから宗伯の時にはすでに堺にいたことは確かであり、永島福太郎氏が推定されるように、⁽⁴⁾ 応仁の乱を経て堺が全盛期に入った頃を境に天王寺屋の名が堺にひろまっていったと思われる。

天王寺屋という名については「開口神社文書」(『堺市史』第四卷所収)に収められる文明七年(一四七五)の田地売渡状に天王寺屋新次郎の名前がみえるのが最も古い。この文書によれば新次郎相伝の地は堺南莊念仏寺に近く、この時すでに居を堺に構えていたと思われる。ついで明応年間に入って二年(一四九三)十一月、大徳寺真珠庵で一休宗純の法要が営まれた際の記録「一休和尚十三回忌出錢帳」に天王寺屋又四郎紹繁がみえるということである。⁽⁵⁾ また同じ頃の書とされる「天陰語録」(『統群書類従』十三所収)には「泉堺天王寺屋主人」として明叟常光のことが記されており、この頃堺に天王寺屋があつて建仁寺の有力檀越となつていたことがわかる。建仁寺のみでなく天王寺屋がいかに禅寺と関係が深かつたかは後述する通りであるが、その関係を示すように「大徳寺文書」には文亀二年(一五〇三)同寺松源院に堺の商人たちが祠堂錢をそれぞれ十貫文宛寄進していることを示す記録があり、そこにも「天王寺屋又二郎、但今ハ源左衛門」とみえる。これらはいずれも天王寺屋を屋号とした商人が十五世紀から十六世紀初頭にかけてすでに堺に存在していたことを実証している。なおこの文書には、古くから堺にあつてのちに会合衆の一人として活躍する能登屋の名のみえることは注目されよう。

天王寺屋という屋号についても確証がないが、当時の文献には「天王寺商人」の名でしばしば京にのぼり取引していた商人が多かったことから、あるいは津田氏も先ず大阪天王寺に住し、のち堺に移ったのかもしれない。

宗伯について好史料となるのが三条西実隆(四五七—四五七)による『実隆公記』とよばれる大部の日記である。実隆は室町後期の公家文化を代表する人物で、戦国動乱の皇室衰退期にあってその恢復に奔走し、また伝統的学問文化を公家、武士をはじめ一般庶民にいたるまでひろめた人物として知られている。『実隆公記』は文明六年から天文二年までという実に六十年に及ぶもので、その史的価値も大きい。これによると、永正から享祿にかけて多くの商人にまじって宗伯が実隆の屋敷に出入りしていたことがわかる。

先ず大永四年(一五四)四月七日の条に「宗白堺者、唐墨一延持来」とみえるがこれは天王寺屋宗伯をさすと思われる。これを最初として以後しばしば姿をみせており、一介の商人であった宗伯がすでにこの時公家社会と接していたことを知ることができる。ところで宗伯が何を通して実隆と交流があったかといえ、単なる商人としてだけではなかったであろう。

「明翰抄」(『続群書類従』三一所収)によると、堺連歌師の項に「宗伯、肖柏門弟、則古今肖柏ヨリ傳授」とみえ、さらに堺古今伝授の図には、

牡丹花 ———— 宗 訊

宗 伯 ———— 等 惠

とみえる。肖柏はいうまでもなく室町後期の連歌師として有名な牡丹花肖柏であり、宗伯はその一字を師から譲り受けたとまでいわれる。なお等惠については永正十六年(一五九)六月、遣明使に長歌一篇を贈っていることが記録に残っているが、年代からいっても宗伯と同じ頃活躍した人物と思われる。宗伯等の他にも肖柏に師事して古今伝授をされた堺人は多かつたらしく、同書には武野紹鷗、千利休といったのちに茶道で名高い人の名もみえる。肖柏の名がしばしば『実隆公記』にみえることから、宗伯は師肖柏を通じて実隆の知遇を受けたと考えられ、公家と庶民の交流の一端を窺い知るのである。

一般に庶民が公家や武家社会といかなるつながりをもっていたかを示すものに同朋衆の存在がある。同朋衆とは、室町時代初期に早くもみられるが、將軍や公家の側近に侍して雑務に従っていた。多く「阿弥」という名でよばれた彼等は、諸芸に通じ身分の卑しきにもかかわらずそれらの諸芸をもって貴人に仕える手段としていた人々であった。千利休の祖父が千阿弥と称し、足利義政およびその子義尚に仕えた同朋衆であったことは有名であるが、天王寺屋と共に堺の有力商人であった能登屋や池永氏の場合も、⁸⁾も祖先に「阿弥」を称えるものが存在しており、あるいは將軍

に仕える僧侶の出であったのかもしれない。いずれにせよこの時代の文化の担い手として彼等が成長してきたことを物語っている。ここで天王寺屋が具体的にどのような活躍をしていたかを探ってみよう。

(1) 禅宗との関係

堺商人と禅宗との関係が深かったことは先にも少しふれた通りであるが、なかでも大徳寺とのつながりが大きかったことは両者の関係が商業活動を前提とした寺院経営に結びついていたことからも領けよう。大徳寺真珠庵に伝えられる一休和尚十三回忌出錢帳、同三十三回忌出錢帳、さらには同寺松源院祠堂錢注文書は堺の有力商人等が大徳寺経営に財的援助をしていたことをあらわしている。三浦圭一氏は、大徳寺経営に堺商人の参加を欠くことができなかったことは応仁文明の火乱以後の復興に堺の豪商が財的援助をしたことから明らかであると述べておられるが、かかる堺商人と寺院経営との関係については、大徳寺ばかりでなく当堺の町においても生れていたことは耶蘇会士の書簡が示す通りである。⁽¹⁰⁾ 特に天王寺屋一族の場合をとりあげるならば『実隆公記』享祿四年(二三三)八月十日の条には「出家宗柏」とあり、宗伯自身が得度していることがわかる。その子宗達は大永六年(五五六)九月、大徳寺住持であり、参禅の師であった古岳宗直より宗達の法

号を受け、⁽¹¹⁾ さらに宗及もまた大林宗套から永祿九年(五五六)八月道号を授与されている。⁽¹²⁾ 他に大徳寺塔頭龍光院所蔵文書から特に天王寺屋と大徳寺の関係を示すと思われるものを取りあげよう。

為入寺之資助万緡贈給不依存之厚惠難有躰物候暇日必下向礼
謝付□□恐々謹言

八月廿五日

宗顛(花押)

宗達禅人研右

宗顛、すなわち圓智常照禅師は天文廿年九月廿日大仙院二世として入寺しており、⁽¹³⁾ 従ってこの書状の年代が天文廿年であったと推定され、宗達の財的援助を謝していることがわかる。また年号は不明であるが春屋宗圓(一黙子と号す)の墨跡に次のようなものがある。

日之昨赴更幽老之茶店

治具丁寧羅列八珍矣以俚

語述厚意之謝云

竹裡柴扉迎客開市中

真隱自無挨鳳團可

濟北禅味一鼻松聲

互逆雷

更幽老、すなわち宗及が春屋宗圓を手厚くもてなしている様が窺えよう。

このような関係は、宗達の弟にあたりとされる宗閑が永祿十三年(五七〇)二月、玉仲宗琇の大徳寺一一二世としての就任に際し

二百貫文を寄進していることや、また天正元年(一五七三)における古溪宗陳の入寺の際には古溪会下の僧侶や商人にまじって宗及も金子を献じていることからも実証されよう。⁽¹⁵⁾

大徳寺をはじめとする禅宗と天王寺屋との関係はその後も離れがたいつながりを示し、宗及の次男および外孫にあたる宗玩、宗珉がそれぞれ大徳寺一五六世、一九五世として出世した程であった。彼等は共に大徳寺の名僧とされている。

(2) 商業活動

以上みてきた禅寺との結びつきは天王寺屋の堺における繁栄ぶりを推察させるものであり、かかる財的援助が何に基いていたかといえれば彼等の商業活動によるものであった。天王寺屋が貿易に従事していたことは確かと思われるが、業種、あるいはその組織や実際の活動について具体的に示す史料はほとんど存在しない。

宗伯の子とされる宗達、宗閑、了雲、道叱はそれぞれひとかどの数奇者として活躍したといわれるが、なかでも道叱は事業の上でも大いに業績があった。天王寺屋の商業活動についてはこの道叱を通じてしか明らかでない。「天王寺屋会記」には一族が商売上豊後を中心として九州方面と関係があったことを示す簡書が多くあり、また道叱自身豊後に赴くことがあったらしく、永禄十年二月十日の条に「道叱従豊後、昨日帰津にて候」とみえるのははじめ、しばしば豊後訪問を思わせる記事がみえる。

当時の北九州では博多を中心として、南北朝以来大内氏、大友氏、それに古くからこの地に勢力をもっていた少貳氏等によって支配権が争われ、商人たちは貿易を通じてこれら支配的勢力と通じようとしていた。彼等は封建領主や地方大名と衝突することなく、むしろ融和することによって、自らの力を大きくしていったが、こうした商人の代表的なものに神谷家と島井家があった。神谷家では六代宗湛が名高く、彼の祖父にあたる四代宗漸の頃から海外貿易に活動するようになり、大友氏に仕えて大きな富を貯えたといわれる。同様に代々博多商人として盛えてきた島井家も、大友氏がこの地で中心勢力となるにつれ、何らかの関係を結んでいたであろう。天王寺屋と大友氏との関係は早くも永禄五年(一五三三)十一月廿一日に宗達が豊後から上洛していた田村宗切を招いて「御屋形へ御首信之茶湯」をもてなしているところから、この時すでに両者の関係が生れていたと思われる。「島井文書」にはたびたび道叱の名前がみえ、彼の九州における活躍を知り得るのであるが、大友氏と島井宗室の関係は大体元龜、天正年間と推定されており、⁽¹⁶⁾両者の関係があるいは道叱を通じて生まれたのかもしれない。田中健夫氏は著書『島井宗室』の中で「島井宗室と大友氏および堺商人天王寺屋道叱との交渉」という章をもうけて詳しくその関係を説明され、彼等が結びついた関係については「商売のみとか、茶道のみとかいった単純な結びつきではなく、可能なルートは双方でことごとく利用し合うといった複雑な方式で結びつけられていたようである」と述べておられる。一方、大友

氏の家臣、吉弘宗例が宗室に宛てた書状⁽¹⁷⁾から両者の関係を知ることができるとが出来る。

一、道叱事可被罷下之由、雖被成御書候、未上着候哉。近日自叱も書状到来候つれ共、右之首尾無之候キ。併必可有下国と楽申事候。叱下着候者宗叱可有御上国之由是又本望候。

これより道叱が近日豊後に着く筈であること、その際には豊後に赴くようにと宗室に呼びかけている。この書状の年代であるが、田中氏の見解による天正元年から六年という説をさらに「天王寺屋会記」の内容にあてはめてみると、天正四年までのものと思われ、この頃までには大友氏をめぐって道叱と宗室が密接な関係にあったことが推察されるのである。しかも大友氏が道叱とのみ親しかつたのではなく、天王寺屋一族とも同様の関係にあったことは、のち天正十六年(一五六)上洛した宗麟の嗣子義統が道叱の茶会に招かれ、「うす茶参候て、廣間へ御座候、宗及、了雲、宗叱、宗云、九和など被参候て、色々の御雑談」と記していることや、つづいて宗及の屋敷に赴いた際には、「さて天目宗達以来の見物にて候」と宗達伝来の茶器にふれていることから充分読みとることができよう。⁽¹⁸⁾

天王寺屋がおこなっていた商業活動については道叱を通してわずかに知り得るだけである。しかしながら、のち宗室や神谷宗湛が京畿地方に出現し、宗及を通じて信長や秀吉と関係をもち、商業行為を推進していったことは天王寺屋自身の商人としての権威

を物語ってはいないだろうか。

註

- (1) 「河瀬虎三郎氏所蔵文書」におさめられる永祿五年四月廿四日付の宗達の書状に「同名宗閑并了雲」とみえる。(『淡交』三十一六、永島福太郎氏の解説参照)。
- (2) 「天王寺屋会記」(『茶道古典全集』第七卷所収) 解題。
- (3) 『茶人系譜』寛政八年刊、『茶事談』宝曆九年刊、共に国立国会図書館所蔵本による。
- (4) 前掲「天王寺屋会記」解題。
- (5) 同右書、なおこの文書に関しては『図説茶道大系』六で芳賀幸四郎氏が詳細に解説されている。
- (6) 「大徳寺文書」五(『大日本古文書』家わけ十七) 所収「堺衆祠堂銭預り状」。
- (7) 『堺市史』第七卷、等恵の項。
- (8) 「開口神社文書」・「御前落居奉書」(『堺市史』第四卷所収)。
- (9) 「大徳寺をめぐる商人たち」(京都大学読史会編『国史論集』二所収)。
- (10) パードレ・ガスパル・ビセラは、一五七一年十月六日(元亀二年)付の書簡(『耶蘇会士日本通信』下巻 所収)の中で、「堺は人口多き富裕なる市にして、海の良き港なるが、百を超えたる多数の宏壮なる僧院あり。其地は富裕にして坊主等は富の大部分を収納する……又市の重立ちたる者の子息等

僧院に在り、一層之を隆昌ならしむるが故に、庶民は之を尊敬し鄭重に遇せり。住民多数なるが故に僧院及び住宅は多くの金銭を所有す」と報告している。

- (11) 大徳寺塔頭竜光院所蔵「津田宗達法号授与文書」。
- (12) 同院所蔵「津田宗及道号頌語」。
- (13) 『大徳寺正燈世譜』。
- (14) 前掲三浦圭一「大徳寺をめぐる商人たち」。
- (15) 大徳寺塔頭高桐院所蔵「古溪和尚入寺奉加帳」(芳賀幸四郎『千利休』参照)。
- (16) 田中健夫『島井宗室』。
- (17) 同右書所載『島井文書』。
- (18) 「浦上長門入道道冊書状」(『大友史料』第二輯所収) 天正十六年三月二十日付。

四

このようにみてくると堺における天王寺屋一族の活躍は目覚しいものではあったが、それらは特に堺商人の性格をあらわすものではなく、むしろ畿内における上層町人にみられる一般的な傾向のように思われる。

すでにふれた通り、堺商人の特質はやはり封建領主に支配され

ない独自の自治組織をもったことにあった。しかしながら、堺にあって町政の実権をにぎっていた天王寺屋一族ではあったが、信長の畿内平定に伴って信長に接近し、結局は結ぶこととなる。史料の上では必ずしも明瞭ではないが、信長と堺衆との対立の際に今井宗久等とともに和平論を主唱したといわれる宗及の態度は、天王寺屋のその後の運命をきめたといっても過言ではない。この項においては、信長という一人の権力者が堺の町に登場したとき天王寺屋一族、および堺商人がそれに抵抗していかなる動きをみせたか、さらには信長の前に屈した彼等が自己の発展を策して権力者と接近するにいたる過程をめぐって、堺商人の性格を探ってみよう。

(1) 権力者への抵抗

堺の町は応仁の乱後管領家畠山氏や細川氏の権力争いの場とされたこともあったが、この頃すでに存在していた会合衆は町政にたずさわるとともに仲裁にもつとめ、堺が戦火の渦中にまきこまれるのを防ぐことが多かった。彼等の活躍については、天文十五年(一五四六)八月、細川晴元が畠山政国の拳兵をきき、三好長慶に命じて畠山征伐のため、堺に攻めこませた際の記録にもあらわれる。いま、「重編応仁記」(『堺市史』第四巻所収)から当時の模様をさぐってみよう。

八月十六日(範長軍)手勢ヲ率シテ泉州ノ堺ノ庄ニ軍立ス。

氏綱方モ遊佐方モ公方家ノ味方トシテ多数ヲ催ケル程ニ、河州和州ハ不及謂ニ近国ノ大軍馳集テ堺津エ押寄幾重共無ク取圍テ範長甚難儀ニ及ブ。堺津会合衆ト云ヘル三十六人庄官ノ富家共出合テ色々ニ取扱ヒ、範長漸々引退テ一命ハ助リケリ。

この文書は会合衆三十六人の存在を示す史料であると同時に、範長、すなわち三好長慶が堺に包囲されて危機に陥ったのを彼等会合衆が救ったことを示す。のちにおける堺衆と三好氏との結びつきを示唆しているといえないだろうか。

三好氏は以後堺にあって権勢を張り、堺衆とのつながりは深まるが、天王寺屋との関係も密接になっていく。「天王寺屋会記」から両者の関係を追うならば早くも天文年間に交渉があったことがわかる。弘治二年(一五五)十月には道叱が、当時阿波に居城していた三好豊前守之康(物外軒実休と号す)を訪れているのに続き、宗達自身も「十一月廿一日罷立、同廿八日ニ阿州へ着申候、同日ニ豊州へ御礼参」と記しており、天王寺屋と三好氏との関係の深かったことがわかる。しかも阿波訪問は今井宗久等も翌三年十月に果しており、⁽¹⁾商売のための訪問というより、三好氏との交渉が主目的であったと思われる。三好氏はこの後たびたび堺を訪れ、天王寺屋一族と親しく交わっていることから両者の結びつきの深さを知ることができる。

同様に三好氏一族のごとき密接な間柄にあったものに下間氏一族がある。下間氏は石山本願寺の坊官をつとめたことで知られて

いるが、天文年間の記録にみえるだけでも天王寺屋一族に招かれること十回に及ぶ。両者の関係が単なる数奇者としてのものにおわらなかつたのは言うまでもない。のちに信長が宗及を始めとする有力商人を本願寺勢力からきり離さんとしたのも本願寺と彼等との結合を恐れたためであり、この頃から経済的に結びついていたことが充分考えられるのである。彼等が堺衆との連繋をいかに重視していたかは永禄九年(一五六)五月、三好義継および三人衆が松永久秀と争った際の三好方の態度でもわかる。堺衆は三好軍が撤兵を果さないときにはあくまで三好氏に反抗することを申出たのに対し、「堺ノ上下共ニ松永方ト成ヘキ上ハ合戦勝負モ計リ難シ⁽²⁾。此以後又軍用ノ資糧金銀当庄ノ者ニ背カレテハ事ヲ闕事有ヘシ」と危惧し、堺の申出に従ったのであった。堺衆を「軍用ノ資糧金銀」の援助者としていることは当時における三好氏と堺商人の間柄を何よりも証明している。またこの時の記録として「総見記」(『堺市史』第四巻所収)によれば、「堺ノ津ハ昔ヨリ富祐ノ地ニテ福人多シ、中ニモ能登屋臙脂屋ト云フ兩人ノ者ヲ長トシテ卅六人ノ庄官有リ」とみえ、三好氏との交渉にあって能登屋・臙脂屋を中心とした会合衆が活躍したことがわかる。

三好、下間両氏との交渉にかぎらず、当時の茶寄合、連歌会といった町衆の集いが単なる享楽のためばかりでないこと、堺衆と彼等との集会の背後における政治的、外交的な意味をも充分考慮する必要があると思われる。堺における有力町人の集まりはしばしば天王寺屋の屋敷内で行われたらしく、「町衆」「年寄衆」「南

北老若」(南北両荘の老若の意)等と称する多くの町人が訪れている。永祿四年六月には町惣代を含めた廿七人の町衆、次いで五年一月には町衆、年寄衆が多勢集まっていることによっても示されよう。なお当時の堺南荘の惣代として今阿弥の名がみえるが、この惣代と会合衆との関係については今後さらに考察の必要があるろう。

宗達が永祿九年(二五六)八月二日に没したのち、三好氏と天王寺屋との関係は前にもまして深く、十一年になると二月廿六日の記事に、「三好日向殿(長逸) 下野殿(政康) 山城殿(康長) 志野原殿(藤原右京進長房) 同弾正殿 其外各々百五十人斗」が大挙して宗及を訪れていることは特筆すべきである。この年の九月、信長は將軍義昭を奉じて入洛し、三好長逸、同政康、岩成友通のいわゆる三好三人衆を降すのであるが、宗及の屋敷におけるこの日の集まりが政略的な会合であったことは疑いないところである。そしてのちに宗及が信長に接近し、今井宗久、千利休と共に信長の茶頭として知行を得るにいたることを考えるとき、彼がこの際いかなる態度を示したかは甚だ興味深い。しかしながら十月に堺に攻めこんだ信長に対し、堺の町は宗及等三十六人の庄官を先頭として主戦論を唱え、合戦の用意をして信長に抵抗したところからみても、宗及の心が信長に傾くには間があったのではないだろうか。

堺衆の権力者への態度を理解するために、永祿十一年頃の史料を中心に少し詳細に当時の堺について考察しようと思う。「末吉文書」にみえる次の書状は堺の強い決意を物語るものとして有

名である。

織田上総介近日馳上候 其聞候其元於御同心者双方示合出向
領堺可防之候 為御相談如此候 恐惶謹言

堺会合等(衆力)

平野庄年寄御衆中

攝津平野は堺と同様に自治組織をもった町で、堺との関係について豊田武氏は「一種の都市同盟」に近いものであったらしいと述べておられるが、この文書はその年寄衆に宛てて共同防衛をうながした堺商人を示している。永祿十一年は五月末から十月までの半年近く宗及の記録に一度も町衆の集会が見えず、また信長が堺南北両荘に対して課した矢銭を拒んだことが同年十月の「重編応仁記」に記されている。

堺ノ津ハ、皆三好家ノ味方ニテ、庄官三十六人ノ長者共、中御請申ス事無ク、不同心ノ由シヲ申ス、然ラハ早速ニ堺ノ津ヲ攻破ラント有ケレバ、三十六人ノ者共、彌以怒ヲ含ミ、能登屋、臙脂屋両庄官ヲ大将トシ、堺ノ津一庄ノ諸人、多勢一味シ、溢レ者諸浪人等相集テ、此口ニ菱ヲ時キ、堀ヲ深くシ槽ヲ揚ゲ、専ラ合戦ノ用意ヲシテ、信長勢ヲ防カントス

堺の戦乱状態はこれより推察されよう。さらに当時の様子を宗及自身の記録に求めると、永祿十二年正月十一日の条に「去年十月比ヨリ、堀ヲホリ、矢倉ヲアレ、事外用意共イタシ候事無専、堺津中之道具女子共迄、大坂、平野へ落シ申候也」とあり、堺が防戦にあけくれしていたことが手にとるようになるのである。こ

の結果「三好方打マケ」、また戦わずして松永久秀も信長に降ったが、信長は堺が三好氏に味方して抵抗を示したことを責め、矢銭二万貫を課した⁽⁸⁾。これに対し一時は抵抗を示した会合衆も、ついに信長の實力を認め、黄金二万貫を以て罪をのがれたのであった⁽⁹⁾。なおこの時もまた会合衆として能登屋・膳脂屋が強硬派にたったことがわかるが、以後、全くその名のみえぬところから、「武徳編年集成」が「逆徒皆四国へ逃亡」と記しているように彼等も堺を去ったのかもしれない。これに対し今井宗久や津田宗及等穩健派は時世を觀破し、主戦論を説得したといわれているが、宗久はともかくとして宗及⁽¹⁰⁾に関する確証はない。強硬派の中に宗及の名のみえないことや、のちに信長に召しかかえられたこと等からそのようにいわれるようになったのではないだろうか。

(2) 信長との結びつき

「天王寺屋會記」によれば、永禄十二年(一五九)二月十一日、「上使衆」と称する信長直臣の柴田勝家、佐久間信盛等百人斗が宗及を訪れ、終日宴をはっていることが記されている。信長と堺との対立が結果的には堺側の全面的な降服におわったことを示す史料であり、そして同時に能登屋等旧勢力にかわつて天王寺屋がその代表として信長の上使をもてなしていることから、今後の天王寺屋の方向を裏づけているようにも思える。

宗及がいつ頃から信長に接近していったかは史料の上からは

きり断定できない。宗久ほど早くはなかったにせよ、信長が名実共に全国平定に成功する元龜末年頃から両者の間が密接になっていったように思われる。宗及個人が信長と関係をもつのは元龜元年(一五七〇)で、信長が堺にある名器を堺の代官松井友閑に命じて集めさせたが、宗及秘蔵の絵もその中に含まれていた⁽¹¹⁾。このことは信長の名器蒐集にかられた行為とのみ受けとることは許されない。何故なら信長は堺衆を手なずける手段として茶道を利用したと考えられるからである。信長と茶道の関係についてはいろいろ論じられているが、彼の茶の湯にみせた執心は必ずしもそれのみにおいて理解されるべきものではない。林屋辰三郎氏は信長、秀吉等の茶器蒐集に関して「各地の名器をとり集め、それらを戦功に報いる為に一國を与える位の価値をもって武將に与えた」と述べておられるが、武士に対する懐柔政策としてとられた茶の湯は堺商人に対しても同様の意味をもっていた。

彼が当時一般町人の間にひろまりつつあった茶の湯をどうみていたかを示す興味深いものに天正六年(一五七八)十月一日の「当代記」⁽¹³⁾の記事がある。

信長曰、甚九郎数奇殊外上手也、乍去武士たる者不可羨、夕庵申云、為士者強好此道は武道は可廢、果町人職人之業也、信長令承諾、

文中「甚九郎」とあるのは信長の家臣佐久間信盛の子で、後天正八年石山本願寺合戦の最中に茶事に耽溺した罪によって罰せられたほどの数奇者として知られ、茶湯三昧な生き方をした人であっ

た。信長の老臣、武井夕庵の言葉に茶の湯は町人職人の慰み事である、とあり、信長も武士たる者が武道をおろそかにすることを恐れていることがわかるが、後年秀吉以外の家臣に茶道を禁じていることなどから、信長自身の中に二つの考え方の推移を知るのである。一つには武士、商人等の懐柔策として、すなわち自己の勢力拡張のための手段として茶の湯をみなしていることであり、他の一つは茶の湯は武士のものでなく町人職人等一般庶民の芸事であるとして用いられていることである。前者は当然信長の勢力不安定の時の手段に用いられたことを意味し、その点では堺衆に示した信長の態度がよく示していると思われる。

このような懐柔政策と相俟つて、宗及は信長に接近していったが、信長の方で堺衆としての宗及をいかに重視していたかは「天王寺屋会記」その他にみえる宗及の行動から明らかになる。はじめは堺商人を代表するものとして信長との衝突を避ける立場にあった宗及が、天正年間に入る頃から宗及一人のために信長が特別に響応をなしていることや、千利休、今井宗久を加えた三人が特に堺町人の中でも厚遇されるようになることから、特権商人化していく姿をみることができるといえる。そこにはかつての自由都市の実権者の姿はみあたらない。一豪商が、その性格の故にかかる権力者の傘下へとむかう成行きを知るばかりである。

註

- (1) 「天王寺屋会記」第八卷、弘治三年十月八日の項。

- (2) 「重編応仁記」(『堺市史』第四卷所収)。
 (3) 宗達没年に關しては大徳寺竜光院所蔵「大通宗達居士七周忌香語」同「宗達十三回忌拈香法号」が明らかにする。
 (4) 「天王寺屋会記」第七卷、天正六年四月一日の条に「御朱印被下井黄金五十枚拝領仕候」とみえる。
 (5) 『堺市史』第四卷所収。
 (6) 前掲豊田武『堺』。
 (7) 『大日本史料』第十編之一所収。
 (8) 「細川両家記」・「足利季世記」・「重編応仁記」(『大日本史料』第十編之一所収)。
 (9) 「武徳編年集成」(『堺市史』第四卷所収)。
 (10) 今井宗久がいつ頃から信長に結びついていたかは『信長公記』や『言継卿記』永禄十一・二年の記事が示している。
 (11) 「甫庵信長記」(『大日本史料』第十編之四所収)。「信長公記」(『改定史籍集覽』十九所収)「当代記」(『史籍雜纂』二所収)。
 (12) 『淡交』九一十。
 (13) 『史籍雜纂』二三所収。
 (14) 「金井文書」(『大日本史料』第十一編之二所収)天正十年十月十八日の条。

五

「天王寺屋會記」その他より、宗達、宗及を中心に、十六世紀を生きぬいてきた天王寺屋一族の動きを追求してきた。禅宗との関係、貿易商人としての活躍、また自治組織にあずかる会合衆としての動き、さらには文化史上におけるめざましい業績等、一族の動向は多くの意味を含んでいる。とくに最も繁栄を示した宗及の時代に、他の堺商人と団結して信長に抵抗したにもかかわらず遂には専制的権力と直接結びついたことは何を意味するのか。転換期における彼等一族の変転は、当然たどるべき運命だったのであろうか。このようなことを念頭におきながら以上の考察をまとめてみようと思う。

天王寺屋の行動を二つの観点から考えてみたい。先ず堺商人としての彼等の性格である。当時の堺人の気風については種々記録されているが、

「堺の市民の傲慢で気位の高いことは非常なもので、彼等は欲望をほしのままにし、暴利をむさぼり、快楽にひたる」⁽¹⁾

「堺の人は傲慢にして信義を重ざるが故に長く待つに非ざれば効果を期待すべからずと考へたり。彼等はキリシタンとなり天国に行くも、此世の信用を失ふことあらば之を奉ずるを欲せずと公言せり」⁽²⁾

と耶蘇会士たちが評したように、当時の堺商人は異邦人の目には極めて現実主義・実利主義に写ったと思われる。かかる商人の性格

は信長の懐柔政策と相俟って信長に媚び諂う結果を生みだした。これを別の面からいうならば、封建的専制君主に属した堺商人のたどった運命は、中世末期においてヨーロッパの都市と一面では比較されながらも、いまだなお彼等の自由都市として発展しきれぬ弱さをあらわしたといえないだろうか。そしてまた、そうした弱さと同時に、天王寺屋のごとき勢力を誇ったものでさえ、なおより強い権力者の前に屈し、次の時代には彼等のあるものは御用商人化していったことを考えるとき、我が国の歴史において必ずしもこの時代のみ、そしてまた商人に限られた現象ではなかったように感ずるのである。

次に文化史的に天王寺屋の存在意義を問うてみよう。彼等がいかに文化人として傑出した人物であったかはすでに述べた通りであるが、特に宗及に関しては、千利休と共に茶道史を代表する第一流の茶人であったことは認めねばならない。寛永十七年(二六〇)の著とされる『長闇堂記』⁽³⁾の作者は、^(利休)「千宗易・天王寺屋宗及・^(今井)納屋宗久の三人は、堺より召出され、御領地被下、専らの御茶湯なれば、しもくに至るまで此道たしなみあへり。南北に宗及弟子六十人ばかり、宗易弟子三十人程ありしを、秀吉公御師匠に召れしより、世の中皆宗易かかりの茶の湯とはなれるものなり」と述べているが、宗及が一時は利休にもまさる存在であったことが窺われるのである。

東山時代に代表される厳肅華麗を尊ぶ貴族的な雰囲気茶道に比べて、村田珠光・武野紹鷗を経て伝えられたこの時代の茶道の

伝統は、「紹鷗侘の文」⁽⁴⁾にもみられるごとく、「侘と云ふこと葉は、故人も色々に歌にも詠じけれ共、ちかくは、正直に慎しみ深くおごらぬさまを侘といふ」とあるように「侘び茶」によって代表されるものであった。そしてその精神は武井夕庵の言葉にあったように一般町人にうけつがれていった。茶の湯がいかに庶民に普及していたかは、興福寺の多聞院英俊が「茶湯都鄙僧俗以外増倍」⁽⁵⁾と記していることや、また天正十五年(一五七)十月の有名な北野大茶会における触れ書⁽⁶⁾の中で、

一、茶湯執心之ものは、若党・町人・百性以下⁽⁷⁾によらず、釜壹、つるへ一、のみ物壹、茶はこかしにても不苦候、ひっさけ来可然事

とあることからわかるのである。しかしながらそうした一般庶民のものであった茶の湯がいつしか侘び茶を目あてとした簡素なもの⁽⁸⁾をこえて豪華なものへと進んでいった背後には、堺衆の経済的繁栄、ならびに織豊政権と彼等の間に茶の湯が大きな位置を占めるに至つた事実を忘れてはなるまい。彼等は経済的に栄華を極めるにつれ、紹鷗・利休のような人がさび、わびをとなえる反面何百貫という巨額を投じて名器を手に入れることに奔走した。千利休においてすら多くの矛盾した性格をみせていることは多くの人の論じてきたところである。堺町人にみる実利主義的傾向は利休、宗及等堺流の茶を代表する二人においても否定しざること⁽⁹⁾は許されないであろう。利休の自害を知つた多聞院英俊が、「スキ者ノ宗益今暁腹了ト、近年新儀ノ道具共用意シテ高直ニウル、

マイスノ頂上也トテ歎」と評していることも忘れてはならない。利休、宗及に限らず、特に堺商人の間に流行した茶の湯が、信長によって懐柔政策に用いられたときすでに侘び茶の真髄は失われたといえは誇張であろうか。

註

- (1) ルイス・フロイス『日本史』永禄四・五年頃の項。
- (2) 『耶蘇会士日本通信』上巻所収、一五六三年(永禄六年)パードレ・ガスパル・ビレラの書簡。
- (3) 『新修茶道全集』巻九所収。
- (4) 『新修茶道全集』巻八所収。
- (5) 『多聞院日記』三、天正七年正月十八日。
- (6) 『北野大茶湯記』(『群書類従』十二所収)。
- (7) 千利休に関する研究は多く、最近でも桑田忠親、唐木順三、芳賀幸四郎氏等の名著がある。
- (8) 『多聞院日記』四、天正十九年二月廿八日。